

創立90周年に寄せて



ともに農業による若者の育成を

鳥取県立倉吉農業高等学校長 田中正士
鳥取県高等学校長協会会長

鳥取県立農業大学校が創立90周年を迎えられることに、心からお祝いを申し上げます。

さて、鳥取県の農業を取り巻く環境はかつてないほど厳しいものがあります。若い就農者が少なく高齢化が進み、そして後を継ぐ人のいなくなった耕作放棄地が広がっています。我が国の食糧自給率が長期的に低下傾向である中、若い農業者を育てるということは、我々農業教育に携わる者の喫緊の課題です。

こういった現状を受けて、本校と農業大学校とは3年ほど前から「スーパー農林水産業士」の制度創設に向けて協力をしてまいりました。この制度は、知事が先頭に立って、鳥取県農林水産部、鳥取県教育委員会、鳥取大学農学部、農業大学校、県内の農業高校が、一体となって本県の農業を支える人材を育てるというものです。農業高校で農業の基礎技術をしっかりと学び、さらに農業大学校や鳥取大学農学部で、さらに研究を深めたりマネジメントを学ぶことで、鳥取県の主要産業としての農業を支えることのできる人材を育てるというシステムです。昨年度に3名の農業高校生（倉吉農業高校1名、智頭農林高校2名）が認定を受け、知事から直接認定証をいただきました。それぞれの進路は、鳥取大学農学部、農業大学校、森林組合と、この制度の目的にかなった「金の卵」が誕生しています。この先も多くの若者が認定されることを願ってやみません。また一方では、悲願であった農業大学校から鳥取大学農学部への編入の第一号が誕生しました。まさに鳥取大学農学部、農業大学校、農業高校が三位一体となって県内の農業の人材を育てる仕組みが作り上げられたと思っています。この仕組みを活かして、この先多くの有能な人材を育て、農業によって、「農業県・鳥取」の発展を成し遂げて欲しいものと期待しています。

大学教授や企業経営者からなる「日本創生会議」の人口減少問題検討分科会が、平成26年に「2040年には全国1,800市区町村の半分の存続が難しくなる」という予測をまとめて発表しました。また、国土交通省も全国6割の地域で2050年には人口が半分になり、さらに2割にあたる地域では住む人がいなくなるとしています。鳥取県でも平成20年には人口が60万人を割り込み、2030年（平成42年）には50万人を割り込むという推計が出されています。このことを証明するかのように、若い世代が県外の大学に進学し、そしてそのまま県外で就職して帰ってこない現象が続いています。このまま手をこまねいては、やがて鳥取県に人がいなくなるかもしれません。

「農業」こそ、鳥取県の未来を決定する大切な要素となり得るものです。そしてそのなかでも大きなキーワードが若い世代の農業人材育成です。それこそが我々農業教育に従事する者の使命だと思っています。この先も農業大学校、農業高校、鳥取大学農学部、県農林水産部、県教育委員会が一体となった取組が求められます。

全国的には農業を舞台として、特に6次産業化した分野で、地域の核となって活躍している農業法人や農家が数多く見られるようになってきました。本県でもこのような人材を育てていかないと、鳥取県の未来は輝いてきません。倉吉農業高校と農業大学校、いつまでも強いチームワークで、ともに農業の未来を目指したいと思っています。



次代を担う農業経営者の育成を目指して

鳥取大学名誉教授 小林 一
放送大学鳥取学習センター所長

学校創設から90年の歴史を刻み、今日の鳥取県立農業大学校として発展を遂げてこられたことに衷心より御祝辞を申し述べます。この間、地元鳥取県を中心に大勢の卒業生を輩出し、地域の農業・農村の発展に貢献してこられた社会的意義は誠に大きく、慶賀の至りに存じます。小職が、本学の学生教育に関与したのは、平成11年度から15年度までの4年間に過ぎません。しかし、農業情報処理学の授業を通じて学生諸君と交流し、ささやかながら農業後継者の育成に寄与することができたことは誉れです。

農業経営研究を専門とする小職にとって、農業経営実態調査は研究推進のための欠かせない手段です。そのため、これまで全国の農業生産現場を歩いて実に多くの農業者と交流させてもらってきました。その折、農業大学校を卒業して活躍しておられる農業経営者とお会いした機会は数えきれません。農業に対する強い問題意識と深い愛情を持ち、地域リーダーとして活動しておられる姿は、農業大学校の卒業生に対する共通した印象です。

全国の農業大学校には、農業経営の担い手を養成する中核的な機関として、社会的使命が与えられています。現在の農業大学校卒業生が農業経営の後継者として就農する割合は、以前に比べて低下しています。とはいえ、雇用就農や関連産業従事を含めると、依然として農業界に対して大きな貢献を果たしています。これからの農業大学校が、高等学校等の新規学卒者ばかりでなく、多くの社会人を入学生として受け入れ、農業・農村に向けて有為な人材を輩出して、いっそう大きな貢献を果たされるよう期待するところです。

小職は専門を生かし、これまで農業経営管理に関する夜学校を設けて、農業者と共に学んできました。夜学校は、日中の農作業を終えた会員が集い、農業経営管理について学ぶ自主的な学習の場です。鳥取県では、平成3年から活動を行ってきましたので、ともに学んだ農業者や改良普及員の方々は多数に上ります。そうした農業者との交流の場で、農業経営者として成長するための理念を掲げることの重要性を、会員との共通認識としてきました。

日本農業を巡る環境条件は混沌としていて、これからも農業経営に関わる経営条件は厳しく変化することが予想されます。農業経営が困難に直面したとき、羅針盤の役割を果たしてくれるのが農業者の掲げる経営理念です。何を目指して農業経営を行い、経営行動を通していかに自己成長を遂げるのか。こうした考えをまとめた経営理念のもつ重要性を、多くの篤農家や精農家との交流の中から学ばせていただきました。

農業大学校の在学生在が学舎で学ぶのは短期間です。しかしながら、鳥取県立農業大学校には優れた教官や教育施設が備わっており、さらに、一緒に学ぶ友、学舎を共にした同窓の士によるネットワークが存在します。このような恵まれた教育環境のもとで在学生の皆さんが存分に学ばれ、社会に向けて飛翔されますよう祈念して、祝辞とさせていただきます。



創立90周年に寄せて ～思い出あれこれ～

第19代校長 下 中 雅 仁

私は平成22年度および23年度の2年間、校長として農大に奉職させていただきました。実はそれ以前にも、昭和54年度（1978年度）からの4年間は野菜科の職員として、また、平成17年度（2005年度）からの2年間は教育研修部長として農大に勤務しましたので、通算しますと8年間に農大に奉職させていただきました。紙面の都合もありますから、校長時代の思い出に絞って、徒然に思い出すことなどを綴ってみようと思います。

校長時代の思い出の筆頭は、平成23年3月11日に未曾有の東日本大震災が発生したことです。このことに関連し鳥取農大としての対応に心を砕いた記憶があります。平成23年度の入学式に際しては、来賓の皆様にお断りして、入学式参列者全員で、震災犠牲者に対しての黙祷から始めました。予期しなかったことでしたが、入学生代表による宣誓文にも、若者としてどのように支援すべきか…等々が述べられていて、演壇で目頭が熱くなりました。

全校集会等で鳥取農大生として何ができるのかと、学生諸君に問いかけたところ、東北の農大生に寄せ書きを贈ることに決し、学生および職員全員で寄せ書きをして福島農大と宮城農大に贈ったことでした。

折しも、私は全国農業大学校校長会の副会長を拝命していましたので、中央に出かけた折りに、全国の各農大の学生会が主体で、被災した福島農大に寄せ書きを贈る運動を展開しました（その経緯は毎日新聞社主催の「農業記録賞」に論文として応募）。

もう一つ思い出を書かせていただくとすると、それはT君のことです。彼は真面目で優秀な学生でしたので、2年次年の学科の単位取得は順調でしたし、2年次の年末には卒業論文の下書きをすでに完成させていました。

年が明けてT君の成人式が近付いた頃、彼の名前とよく似た青年が自動車事故に遭遇したらしい、との情報が私の携帯に入りました。果たせるかな、事故に遭遇したのはやはりT君でした。T君は彼の友人が運転する軽乗用車に同乗していましたが、道路が凍結していて車がスリップ横転した際に、車外に投げ出されたとのことでした。その晩、私は早速に救急病院を訪問したところ、彼には頭蓋骨骨折をはじめいくつかの骨折があること、そして脳内出血していたので緊急手術が行われたとのことでした。担当医師からは、残酷にも、命の保障はできないと告げられました。集中治療室に入ってみると、従来の彼の優しい顔とかわられない、包帯が巻かれたれムーンフェイスとなっていました。

彼の生きんとする生命力と保護者をはじめとして同級生の皆さんの祈りが通じたのか、彼は奇跡的に蘇りました。

農大の卒業式の日、彼は保護者に付き添われて、車いすで出席してくれました。私は壇上で個々の学生に卒業証書を授与しましたが、T君の名前が呼び上げられた際には壇上から降りて、T君に卒業証書を授与しました。「よく頑張ったね…」と声をかけましたところ、彼は笑顔で答えてくれたので、私は涙が出そうになりました。

農大に勤務していると、いろいろなドラマがあります。その都度、学生に寄り添うことを旨として過ごしたつもりです（「受持分担・一心同体」加藤完治先生の言葉）。しかし、「これで良かったのか…」と自問しますと、色々なことが思い出され自責の念が沸き上がる此の頃です。



経営伝習農場の思い出

経営伝習農場第9期生 小 司 勝 美

創立90周年おめでとうございます。

私は農家の長男として生まれ、子供の頃より家族や周りの人たちに長男は家の農業を継ぐことと言われ育ってきました。中学校卒業前に農業を勉強するなら関金の経営伝習農場が一番良いと先生達に言われました。一年先輩も入学しておられたので同級生3名で昭和33年に共に入学させていただきました。

入学してみたら、鳥取県全体、日野郡八頭郡、岡山県からも来ていた学生は男子だけで、全員が寮生活です。

中学校卒業と同時に入学者は本科生で1年間の就学でした。1年先輩と高校卒業者は研修生で殆どが本科生でした。学校は本館と教室はきれいな建物でしたが、寮と食堂は少し古い建物で、部屋は畳で、一部屋3人で生活しました。先輩も同じ建物で、規律は厳しく、少し恐かったけど寮の生活が若くて優しくて良かった。

本科生は午前と雨降り日は教室で一般勉強で、午後は実習でした。実習は水稻、畜産、果樹、野菜があり、私は野菜を専攻で習おうと思いました。畑に行ってみてビックリ、広い畑が茶の木で整然と区切られてきれいでした。一番初めの実習は里芋植え。広いところにたくさん植えました。鋤を使うことは苦にならなかった。

皆で寮生活なので、給食当番であった私は子供の頃より「男が台所に入ってはダメ」と言われていたので、給食当番は苦手だった。調理のおばさんの手伝いで大きな鍋で汁物とご飯を作る釜に付くおこげをにぎり飯にしてもらい、夜食に皆で食べ、美味しかった。ある当番日にすごい夕立が降り、調理場の近くに大きな音共に雷が落ち、その音にビックリしておばさんが包丁を足に落とし、怪我をされた。その時私は何もできなかった。ごめんなさい。

学校で一番大変だったのは集団赤痢の発生で、友達、先生が次々と入院していく。もう勉強どころではなかった。残った学生で農場のそうじ、消毒、家畜の世話をしました。私は牛が苦手だったけれど、乳牛の世話に行ったら牛が私をギロリと睨み、バカにした様子で頭を向け、そして蹴った。暴れ牛と思い、恐かった。

赤痢の最後の検査で、私も保菌者と分かり、病院に隔離された。少しは体が楽かと思っただ、どこも痛くないのに一人で一週間も病室でじっとしているのは苦しかった。退院して皆と大きな風呂に入り、楽しかった。翌日より晴耕雨読の学校生活に戻り、良かった。

冬の寮は部屋にストーブがなく、火鉢があるだけ。その上に洗面器でうどんを作って食べた。腹に入れば何でも良かった。一年間は直ぐに過ぎた。私が今も元気で野菜作りができるのは、農場で一年間汗して働くことを学んだからです。

今頃の農業は技術の進歩が早く、私いつまでも一年生で頑張っって働いています。農場の野菜の中尾先生お元気とのこと。今も忘れません。今の農場に60年前の面影はなくとも、学んだことは忘れません。今の大学校は立派できれいです。



農業に夢を描いた学校へ!!

農業経営大学校第1回生 山田 恵子

農業大学校創立90周年、おめでとうございます。

私は経大一期生で養鶏専攻で入校しました。振り返れば、父母のもとを離れ、初めての寮生活に不安を持っての入学でした。しかし、一年間、同期の友と学業や寝食を一緒にした思い出は、私の人生で非常に良い体験だったと思います。同期の友は、仲間であり、同士であり、家族みたいなもので、今でも一番心に残る大切な人です。そして、経大で学んだことで県内外の多くの人と出逢い、友達を作ることができました。派遣実習では、東伯食鶏、地元の養鶏家の元で勉強させていただき、とても参考になりました。

卒業してこちらに帰ると学校で学んだ経験を活かして3,000羽の養鶏家として出発し、平成元年まで続けました。その後、時代の流れに合った経営に転換し、現在は梨150a、柿140aの専業農家として家族一丸となって頑張っています。

今、農業は大変な時代であり、後継者不足です。幸いにして我が家は、2人の子供が農業経営に携わってくれています。私は主人と「子供達に夢のある農業をして欲しい」と話し合っています。それは、生産・販売・加工・観光を組み合わせた総合的農業のことです。私たちが今までに取り組んできた独自商品「ぼて柿」の開発販売や農村の豊かさを活かした農家民泊などの経験をもとに、専業農家として自立できるよう子供たちにアドバイスをしています。そして、役割分担を明確にした家族経営協定を締結し、家族皆で経営についての話し合いの場を持っています。長男は販売、次男は農業生産部門を責任とやりがいをもって担当しており、夢のある総合的農業の実現を進めています。

私も70歳を過ぎましたが、老いを感じながらも仕事、人との出会いを楽しみながらこれからも頑張ろうと思っています。

ある時、新聞の片隅に「人生後半が面白い。味がでるのはこれから、これから」と書いてありました。この精神で頑張っていこう！と思います。

12月1日の記念式典では、同期の友とふれあい、思い出語りたいと楽しみにしています。最後になりましたけれど、今後とも将来のある子供のためにも農業大学校の発展を願います。



農業大学校に学んで

農業大学校第1回生 寺道一郎

私が入学したのは、昭和58年4月鳥取県立農業経営大学校の最後の入学生としてでした。翌年の4月からは、現在の鳥取県立農業大学校と改名され、農大第1回卒業生となったわけです。

入学した当初は鳥取弁が分からず、2か月ほどは言葉が理解できず苦勞したことを憶えております。2年間の学生生活は、楽しい思い出もたくさんありますが、実習での辛い思いで真っ先に思い出され、小鴨川での葦刈り、りんご園での網張り、昭和59年の大雪の年、2メートルほど積もった雪に梨園の梨棚の崩壊やりんご園の枝折れ防止のために毎日雪かきをしたことが大変だったと懐かしく思い出されます。

楽しい思い出は、その当時果樹科では一泊で夏の浦富海岸でキャンプ、冬は大山でスキーをしたこと、九州では経験することのない思い出がたくさんできました。

卒業後、地元へ帰り就農し、梨を栽培する中で、農大で勉強したことが幾つも役に立っています。春の摘蕾や人工交配、摘果、袋かけ、収穫、土づくり、剪定誘引。

学生時代は自分なりに一生懸命やっていたはずですが、今思えばまだ甘かったなど。でも、その時の学習が今の梨づくりの基本になっています。

梨栽培も年々新しい技術が開発され、新品種が続々登場する中で、経営としての梨づくりがぶれないよう、基本に忠実に努力を惜しまず、今後も日々研鑽していきたいと思えます。

在学中の皆さん、楽しい思い出とともに苦勞しながら体験した実習は、将来必ず役に立ちます。充実した学生生活をお送りください。

卒業後、果樹科では毎年OB会が開かれており、会長さんをはじめ、幹事の皆さんにはお世話になっております。九州出身の会員も増え、数年に1度しか参加できませんが、当時の先生方や新たに入会された卒業生の方などとお話する場を得ることを楽しみにして、良い勉強の機会となっております。

鳥取県といえば二十世紀梨です。

梨のパイオニアとして、農業大学校とともにこれからも100年、200年と長きにわたり日本梨の先端を進んでもらいたいと思えます。



農業大学校での思い出と感謝

農業大学校第23回生 河岡 誠

昔から物作りが好きで、将来は自動車関係の仕事に就きたいと思っており、4年制大学の工学部を受験しましたが不合格となり、自動車関係の仕事はあきらめました。高校時代に実家のネギ作りの手伝いをしていたのですが、それにも興味があったので、今度は農業をやりたいと思うようになりました。そこで担任の先生に就農の相談をしたところ、農業大学校を薦められました。相談に行ったその日に農大について調べると、その日が出願締め切りの日であり、直ぐに受験の申し込みをしました。この日は、僕が初めて農大を知った時であり、人生最大のターニングポイントになりました。

無事に入学が出来て、農大生活が始まりました。小中高校では家からの通学であり、農大での寮生活は刺激が色々ありました。まじめな話からまじめではない話まで色々経験をしました。

農家留学研修は神戸のトマト生産者の所で40日間住み込みをしながら行きました。研修先の家族の方は厳しく指導してくれました。家族みんながものすごく体力があるし、作業のスピードも速くて、ついていく事がなかなかできませんでした。

農作業の時と休みの時のメリハリをしっかりと作る事。仕事はきっちりするけど、休みではたっぷりと遊ぶことも教わりました。家族みんながすごく明るくて、何をしても、とても楽しそうでした。この時に農大を選んで良かったと思いました。自分も農業をするなら、楽しくやりたいと思いました。この時のトマト生産者とは今でも交流があり、トマトを送ってもらったり、ネギを送ったりしています。神戸の近くに旅行に行く時は、直接家の行ったりもします。仕事からプライベートまで色々な事を教わる事が出来ました。

農大の授業では農業経営から、栽培管理、危険物の扱い方、機械操作・整備、各資格の取得など、全てを教わる事ができました。就農をしてから気が付いたのですが、農大に在学していた事で一番良かったことは、普及員さんや試験場の研究員さんと出会えた事でした。学生時代に知り合った農大の先生が普及所や試験場勤務になり、就農後に栽培などでわからないことがあったら気兼ねなく質問ができます。農大の時に、わからない事は直ぐに質問することが習慣化され、それが今現在も続いています。そのおかげでここまで農業をやってくることができました。

農大では青年農業者との交流もあって同世代の生産者と知り合いになれました。青年の方たちの中にも農大の卒業生が多く、農大の頃の話や、就農後の大切な話を色々教えてくれました。今も青年農業者の集まりに参加させてもらって、色々な事を勉強させてもらっています。

農大は勉強をする事、遊ぶ事、汗をかいて作業をする事の楽しみ、苦しい事、今を楽しむ事など、就農や人生そのものに必要な事の全てを教わる事ができました。こんなに楽しい農業を勉強することが出来る農大がいつまでも続いてほしいです。地域に新規就農者が農大から生まれる度に僕自身も刺激をもらっています。その刺激が僕の農業をいつも楽しませてくれ、さらに発展させてくれます。農大を軸に地域の農業が発展していく事を願っています。いつもありがとうございます。



学校の思い出

農業大学校第34回生 徐 漫 容

走り梅雨に濡れ、木々の緑もいっそう深まったように感じられ、農大のウメはもう出来ているでしょう。たまにホームセンターに作業着や長靴など専攻中に使う道具が目に入って、在学中の仲間たちの顔が頭に浮かび、一緒に作業をしていた光景がどんどん思い出してくる。実は、今年3月に卒業したばかりだ。長くはないけれど懐かしく感じる。

2016年4月11日、リュックと大きいスーツケース2つと手荷物を持って、JR京都の7番線にスーパーはくとを待つ間、心で「これでお別れしましょう！」という声をかけて名残惜しながら京都を出発した。それからの2年間、私は農大で果樹コースに在籍し、リンゴやモモやナシやブドウ等の果物が育ち、果実がどんどん出荷されていく光景を見てきた。その間、日照りでも、雨でも作業を続けましたが、最後に甘くてうまい果実を食べた瞬間に、これまでの疲れは忘れてしまうほどだった。私は、労働を生活の最も重要なものに見なします。毎日大地の温度を自分の手で身体で感じて、農業の辛さ、大変さも分かりました。

台湾出身の私は、農大で非常に多くの初経験をもらった。辛いことがあったけれど、楽しい事はいっぱいだった。例えば、初めての寮生活。チャイムは休日にもお部屋まで届き、軍隊みたいに朝と夜点呼をするのはかなり精神力が必要で、少し苦しかった。先生と他の学生たちは共に日本人しかいないことやスキー教室やソフトボールなどのスポーツも全部ゼロ経験からなので、わくわくしながら挑戦した。しかしそんな中で、特に、プロジェクト発表と卒論作成は最も成長することができたと思う。最初何のテーマでプロジェクトにするのかなかなか思いつかなかった時、途中で問題が起こってどうすればいいか分からなかった時、日本語での発表と論文作成など大変だった。いずれもすべて自らの力で解決できないけれど、幸いに果樹コースの先生はすごくサポートしてくださった。指導教員の森本先生はもちろん、黒木先生と追谷先生にも心より感謝申し上げます。プロジェクト研究が完成したところで、言葉の問題、技術や知識などの能力が不足していることを痛感した。もっともっと努力し、最後まで諦めずに絶対遣りとげると決意し、プロジェクト発表会できちんと発表することができ、本当に良かったと思った。それらの経験はきっと社会人になっても役に立つだろう。

農業大学校90周年おめでとうございます。異国から参った私は農大で新たな体験をいただいた。一方、農大も同様に時代の進歩に伴って今後も様々な新しい挑戦が待っているでしょう。此処に繋がる方々と一緒にサポートし、次の10年に一步一步踏み出していきたいと思います。

最後に、私にとって、最も貴重なのは皆との出会いだと思う。卒業後皆はそれぞれの進路に進んでいき、私はその一緒に過ごした記憶を一生の宝物として心に置き、また逢う日を期待する。